特定非営利活動法人　国際社会人剣道九州クラブ会報
INTERNATIONAL　GOODWILL　KENDO　CLUB

剣志

KEN SHI

2022年87号（令和4年8月）
発行者　九州地区クラブ

会　長　加野　資典
幹事長　山田　雅士

ホームページアドレス　http://www.npo-igkc.or.jp　e メール

突き抜けて　天上の紺　曼珠沙華

山口　誓子

深い青色と鮮やかな赤色を対比。曼珠沙華は彼岸花とも呼ばれて不吉なものとされることもありますが、この句では鮮やかな赤色の生命力あふれる花として表現されています。

8月20日、猛暑とコロナ感染拡大の中、熱中症対策、感染症対策を行い、久留米ランテック道場において2022年8月例会が開催されました。井手勝彦先生の指導による相互稽古、八段と八段一次合格者の先生による指導稽古、最後は自由稽古を行い、充実した稽古会でした。稽古会には25名の会員が集まりました。例会は、空気喚気、室温調整、水分補給を随時行い、暑さを感じさせない環境で稽古を終了することができました。

【稽古会】

日時:令和4年8月20日(土)午後3時00分～4時50分

場所:(株)ランテック剣道場

久留米市宮ノ陣町若松1-3　TEL:0942-36-4125

【出席者:25名】(順不同、敬称略)

小島良守先生　井手勝彦先生　山田雅士先生

（当地区八段の先生3名）

秋山勝年、池永祐一郎、大隈光夫、大塚勝也、佐藤博喜、下林千代鬼、田中昭彦、田中義勝、豊田末雄、中道政生、永岡義規、西田耕陽、西見秀俊、橋本正照、日高久光、溝口勝正、大和竹史、若本晃一、渡辺勝彦、渡邊寛二、打越亨

【大塚副会長挨拶】

大塚副会長から、ご挨拶と若本晃一先生に七段ご昇段のお祝いを贈呈いただきました。

【相互稽古】

講師:井手勝彦先生

内容:切り返し:面を打たせる、竹刀で受ける2種類

一足一刀の間合いから面打ち:一拍子で、左拳は胸の高さ、右拳は肩の高さ、刃筋正しく、すり足、左足の引き付け、腰の安定と手の内の冴えを作る

一足一刀の間合いから面打ち:3回目に打ちぬける。元立ちは3回目の面を返して胴打ち、さらに、3回目は小手打ち

立ち合いの稽古:2分間×3回

【指導稽古】

熱中症対策のため、指導稽古における稽古時間は3分×5回、3分休憩、3分×5回、10分休憩(水分補給)、20分の自由稽古

元立ちの先生は、八段3名および下林先生、池永先生、溝口先生の6名から指導をいただきました。

【新入会員のご紹介】

お名前:打越　亨

段位:五段

※打越様には次月号で、ごあいさつ文を掲載していただく予定です。

【講話】

小島先生:本日の稽古、お疲れ様でした。8月名古屋の八段審査会は残念な結果と聞いております。審査は本番の出来如何で決まります。もし、私が審査員であれば、日頃から先生方の稽古を理解しておりますので、違う結果になると思いますが、審査員は目の前の事実に基づいて合否を判断します。つまり、その日の出来如何にかかっています。そこで、普段の稽古で何をすべきかについて、一つ申し上げます。自分の非(欠点、弱点、課題等)を知ることです。自分の非は相手に打たれることでわかります。打たれたことに感謝し、二度と打たせないとの意識で稽古を積み上げることです。つまり、未熟な点、欠点を相手から教えてもらっているとの謙虚な気持ちで受け止めて、稽古をしてください。打たれるのはいやかもしれませんが、打たれた所を謙虚に受け止め次に生かしていくことが大事です。みなさんはそれだけの実力をすでに保有されています。どうぞ、めげずに頑張ってください。

令和４年９月九州地区クラブ例会のご案内

日時:令和４年９月 17 日(土曜日)15 時～16 時 30 分　場所:(株)ランテック剣道場
相互稽古会　15 時～15 時 30 分（予定）指導講師：井上誠一先生
指導稽古　　15 時 40 分から 16 時 30 分
※3 分間刻みで 10 回の指導稽古を約 30 分実施します。（5 回目、6 回目の間で休憩）
その後、10 分間の水分補給。休憩後は 10 分～20 分間の自由稽古（予定）

山田：m.yamada.kokura.k8@gmail.com
溝口：yumehome@d7.dion.ne.jp

《連絡事項》

1. コロナ感染者が増加しています。行政から行動制限の方針が発表された場合は、９月例会は中止します。
2. 稽古参加の時はマスク着用、検温(各自)でお願いします。体調不良の方は、稽古会のご参加はご遠慮願います。(体温計、消毒液は準備しています。)
3. 稽古会には遠方より参加して頂いておりますので、交通事故等にはご注意ください。
4. 【お詫び】会員名簿(2022 年 5 月 31 日現在)の 19P 森迫多美子先生の段位が六段と記載されています。正しくは「七段」です。お詫びして、ご報告申し上げます。

七段審査合格(8 月 6 日･於福岡)のご報告

この度の七段審査合格は当会の先生方のご指導があったからこその結果です。

特に、審査の１週間前（７月３０日）、コロナ感染が再び拡がり始めていたにもかかわらず、模擬審査を実施していただき、尾方先生、小島先生、池田先生、井上先生から、ご指導・ご助言・励ましのお言葉をいただきました。このことが、自分に欠けている部分の気付きとなり、また、精神的な支えとなり、さらには、審査に臨む気持ちの整理を行う上での導（しるべ）となりました。また、七段の模擬審査の受審者は私しかいなかったため、４月にご昇段された永岡先生にお相手していただけるよう溝口先生にお取り計らいいただきました。この機会を作っていただいた両先生には感謝の言葉しかありません。このような先生方がいらっしゃる当会の一員であることが支えになったことは言うまでもありません。当会の先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。心からお礼申し上げます。

さて、今回の寄稿は、山田先生から「合格の秘訣」という切り口でとのお話でしたが、それはおこがましいので、今回の審査までの歩みをお話させていただきます。

私は、３５歳の時（２００１年）に、高校３年の玉竜旗以来１８年ぶりに剣道を再開しました。再開した当時は二段で、それから１５年、２０１６年夏（於山口）に六段に合格しました。六段は４回失敗しており、原因は「剣道に対する理解不足」と「心構え（意識）の欠如」だと思っています。４回目の審査（於京都）に落ちた時、審査会場となった体育館のフロアーで「剣道（高野佐三郎著、現代語訳監修・中村民雄、島津書房）」が販売されていたので、帰りに購入し、帰宅後読み込みました。だからと言って５回目の挑戦で「剣道に対する理解不足」と「心構え（意識）の欠如」が克服できたわけではありませんが、僥倖にも恵まれ、何とか合格できました。

六段拝受から６年間、同じ轍は踏ままいと、七段審査に向けて取り組みましたが、後半の約２年半はコロナ禍にあり感染拡大防止を最優先しなければならないため思うように稽古が

できず、また、それを補う努力も怠り（人間の弱さなのでしょうか）、不安な気持ちで審査の申し込みを行いました。

私は、前述の「剣道」を読み始めて以来、同書に紹介されている「両刃鉾を交えて避くるをもちいず、好手かえって火裡の蓮に同じ、宛然自ずから衝天の気あり（両刃交鉾不須避好手還同火裏蓮　宛然自有衝天気）」という言葉を稽古の前に心の中で唱えるようにしていますが、6年間ずっと、その意味が分かりませんでした。それは、第一文（両刃交鉾不須避）に意味があると思っていたからです。ところが、審査の前日になって、もしかして、これは「覚悟」の問題ではないかと思い始めたのです。つまり、蓮は水中の植物だから火中は逆境、「火裡の蓮」の意味は逆境にあっても、あるいは逆境にあってこそ真価（強さ）を発揮するもの、転じて、逆境に身を投じる「覚悟」と思ったのです。

そして、模擬審査において先生方のお言葉も「覚悟」でした。

審査の前日、不安とプレッシャーにより苦しさを感じていましたが、剣道は「逆境にあってこそ」と考えると、開き直りのような気持になり、「気魄（＝覚悟）で立ち会うのみ」という心境になりました。

審査当日は、朝４時に目覚め若干寝不足のような気がしましたが、適度な緊張感とプラス側に捉え、審査会場では、誰とも会話せず、立ち合いに集中するように心掛けました。

では、立ち合いはどうだったかというと、私は午後の５番目の組のＤで、最初の一人はかなり集中できたように思います。三太刀目で出小手（自分の評価は有効打突）を打った際に集中力を阻むような思い（雑念）が生じましたが、一旦、これが生じると、その後崩れるのは模擬審査で経験しており、それ以来、これを払拭することに心を砕いていましたから、この場は何とか気持ちを切り替えることができました。その後も、気を抜かずに攻め、相手が面に来たところを胴に返すなどで応じました。実際6本しか打っていないにもかかわらず、「それまで」の合図を聞いた途端、かなり疲れを感じました。

二人目は、最初の発声は充実していたように思いますが、初太刀は相手の面を防御するのみとなってしまいました。二太刀目は十分剣先で攻め気持ちで乗れたところを面に出たつもりでしたが、出小手を狙われました。それもあってか、三太刀目は体から出るように面に行くと、相手が出遅れて、少し軽かったようにも思いますが、有効打突、あるいは有効打突に近い打ちができたと思います。そして、この時、また雑念が生じ、相手が面に来たので胴に返すのですが、攻めて引き出したわけではないので、間が近く不十分な打ちとなりました。その後、また面に出小手を狙われ「また小手か」という気持ちになったまま、不用意に前に出てしまい、相手の気が充実していたなら完全に打ち取られていた場面がありました。幸いにして相手が先をかけていなかったので、2回の出小手と同様に十分ではなかったように思います。そのことで我に返ったところで時間となりました。

今回の審査にあたり、「身構え」「気構え」「気合」「間合」を意識して稽古に取り組んできました。そして、「己の心に勝つ」ことだけを考えて立ち合いに臨んだつもりですが、その難しさを痛感することとなりました。

今回、コロナ禍の中で無事に受審できたこと、先に記したような失敗があったにもかかわらず合格できたことは、幸運と言う外ありません。それ故、今後も研鑽を怠らず、稽古に励む所存ですので、皆様よろしくお願いします。　　**若本　晃一**